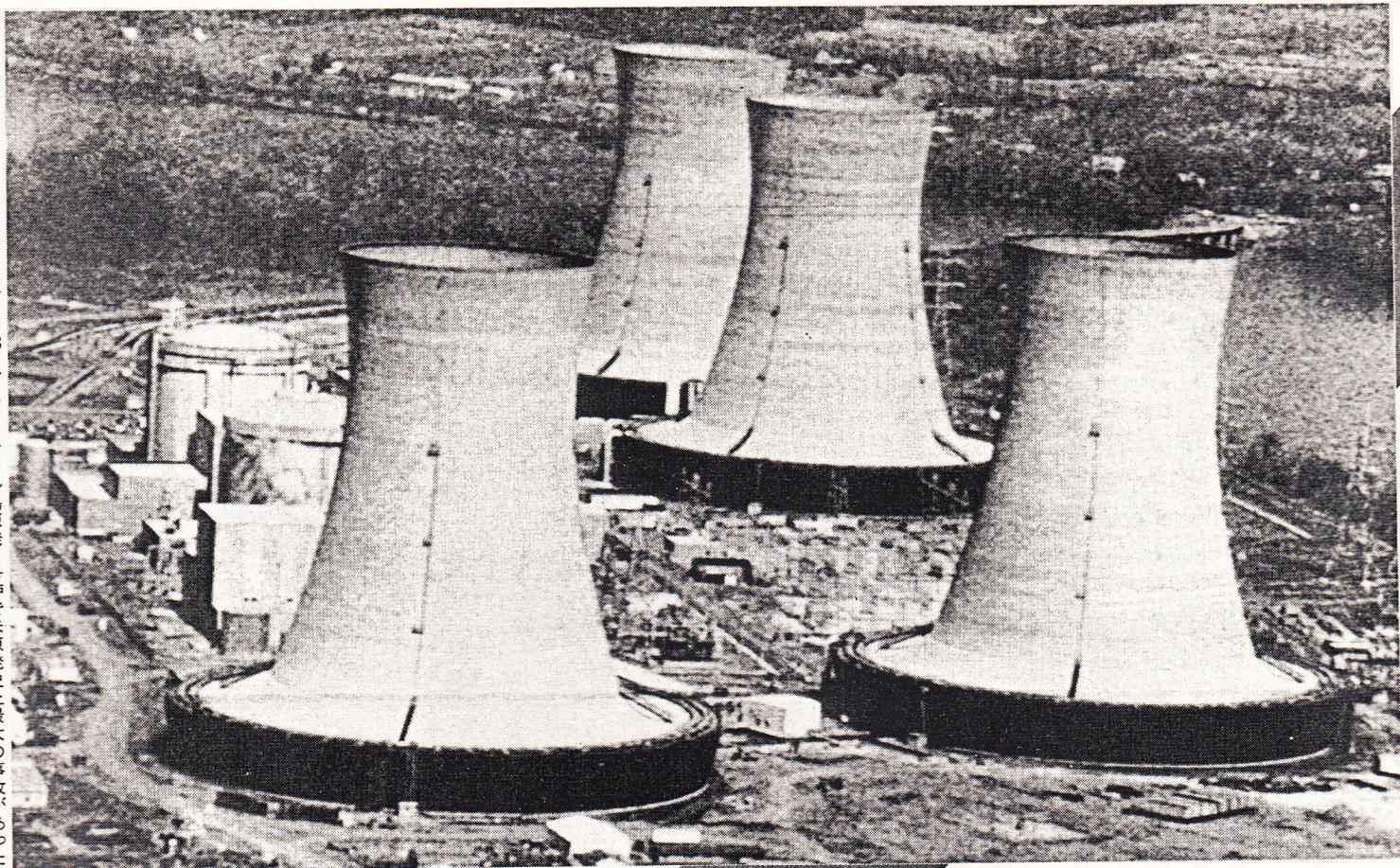


1975年3月28日、スリーマイル島原発2号炉で米原発史上最大の事故があった。



原子力産業の曲り角

—日米欧にみる10年の推移と新しい兆し—

桜井 淳

物理学者・理学博士

原子力産業存続の危機

昨年末のレーガン大統領とゴルバチョフ書記長によるINF（中距離核戦略）軍縮交渉に見るまでもなく、このところ、いわゆる核文明に対する価値観の転換が起きているように思われる。

INFというのは、全核兵器のほんの三、四％程度にすぎず、それが全廃されたからといって、それほど驚くには当たらないという見方もある。しかし、これは量的な問題ではなく、重要なのは考え方の問題である。今、最先端の化学技術、もつとえば核文明に対する考え方が、徐々に変化しつつある。

これは、現在の状況だけを分析しても、なかなか変化の兆しはつかめないが、過去十年あるいは二十年のレンジで原子力の歴史を辿ってみると、一目瞭然に変化の兆しを読み取ることができる。

理解をわかりやすくするために、アメリカの原子力発電所（以下「原発」と略称）の流れを辿ってみよう。別図は、一九六二年から一九九〇年に至るアメリカの原発の推移を、予測も含めて、「発注」と「完成」と「キャンセル」で表したものである。「発注」は、アメリカ国内の状況である。実際には、アメリカの原子力産業は、他の国からも原発の発注を受けているが、その数は微々たるものであり、アメリカの原子力産業全体に影響を及ぼすほどのものではない。「完成」もまた同じである。

図を見て、まず注目されるのは、アメリカでは一九七九年以降数年間、原発の「発注」がゼロであり、原子力産業存続の危機が伝えられている。

図を見てもわかるように、アメリカにおける原発